

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.370



2002 SEPTEMBER



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2003年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2003年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しない。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2003年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

C 2 のコルから左俣氷河源頭部に2つのピークがありI峰のスノー・ピークからコルを経て続く稜線上のピークをIV峰、その奥の頭だけ見せたカシミールの名峰ヌンによく似たピークをV峰と仮称する。

H A J ブリクティ・サイル登山隊1982年

ヒマラヤ No.370

- | | |
|------------------------------------------|-----------|
| 1. 高山病 (high-altitude illness) | ピーター・ハケット |
| 6. ヒマラヤ登山、日本隊50年の記録(2) | 山森 欣一 |
| 10. 新連載 ロー・マンタンの空、遥かなり(4) | 高橋 照 |
| 14. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉 | |
| 16. 8000m峰トータル獲得標高2001 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

高山病 (high-altitude illness)

ピーター・ハケット (コロラド大学健科学センター救急医療部)
ロバート・C・ローチ

高山病 (high-altitude illness) とは、高所に到達してすぐに順応できない人の脳と肺に起こる疾患群である。高所での肺水腫や脳浮腫は、まれではあるが、命に関わる病気である。

■疫学的過程と危険因子

1991年コロラド州での急性高山病の発生率は、海拔1985mから2750mでは22%、3000mでは42%だった。発病の危険因子は、海拔900m以下の住民、運動、以前に心肺に何らかの疾患があったことである。50歳以上の人は、若い人に比べいくらか発病し難いが、子供と成人では発病率は同じである。高血圧、冠動脈疾患、軽度の慢性閉塞性肺疾患、糖尿病、妊娠は発病には影響はない。遺伝的要因と環境因子とが、低酸素による病気の発症に影響を与えているようである。

《急性高山病 (acute mountain sickness) と高所での脳浮腫 (high-altitude cerebraledema)》

■臨床症状と診断

急性高山病は非特異的な症状であり、主観的な病気である。The Lake Louise Consensus Groupは、急性高山病を、海拔2500m以上に達したが、高所に順応できない人に起こる頭痛と、消火器症状 (食欲不振、吐き気、嘔吐)、不眠、めまい、疲労のうち一つ以上の症状が起こったもの、と定義している。まれに2000m以下でも起こりうる。典型的には、症状は、高所に到達して6から10時間以内に起こるが、なかには1時間以内ということもある。脳浮腫を起こさない限り身体的所見からは診断できない。

高所での脳浮腫は、急性高山病や肺水腫のみられる患者に、運動失調や意識状態の変化が出現した場合に、臨床的に診断される。臨床的にも病態生理学的にも、脳浮腫は急性高山病の末期像である。また、高所で肺水腫に陥った患者は、重篤な低酸素状態によって、急性高山病から脳浮腫に至りうる。高所での脳浮腫に附随する所見として、乳頭浮腫、網膜出血 (最もよくみられる所見)、そして、時に、脳圧亢進の結果として脳神経麻痺

がある。しかし、局所的な症状を示すより全般的な脳障害の方がおこりやすい。嗜眠状態が昏迷に続いて生じることはよくある。けいれんは稀である。脳浮腫は数時間から数日で進行する。死亡原因は脳ヘルニアである。

多くの病気が、急性高山病や高所での脳浮腫に似た所見を示す。高所に到達して3日後以降に症状が出る場合、頭痛を訴えない場合、水分補給や休憩を取ることですぐに回復する場合、下降や酸素投与、デキサメサゾン投与に反応がない場合は、他の原因を考慮すべきである。表1に急性高山病や高所での脳浮腫との鑑別疾患をあげる。

■治療と予防

急性高山病と高所での脳浮腫の治療において、3つの原則がある。即ち、

- (1) 症状が改善するまでそれ以上高所に上がってはいけない。
- (2) 治療に反応しない患者は低所まで下げる。
- (3) 脳浮腫の徴候が出たら、低所に下げなければならぬ、である。

表2に4つの臨床症状に対する治療と予防、表3には有効な治療法をあげる。強調すべき点が2、3ある。下降と酸素投与は選択すべき治療であるが、症状が重篤であれば、併用するのがよい。特に、500から1000m下降するだけで通常は急性高山病から回復するが、脳浮腫を起こしていれば、さらに下降する必要がある。Portable hyperbaric chamber (ガモフ・バッグ等) も効果的である。このchamberで2 psi (13.8kpa) の圧をかければ、大体2000m下降したのと同じ状態となる。

下降できず、酸素投与も不可能であれば、薬物療法が必要となる。小規模な、偽薬を用いた研究では、アセタゾラミド (商品名/ダイアモックス) が24時間以内に74%で症状を軽減するとしている。

多くの研究で、デキサメサゾン（商品名：デカドロン）は、ダイアモックスと同等かそれ以上の効果があり、12時間以内に効果が出ると報告している。この両者の薬物の作用機序は異なるが、併用でより一層の効果が期待できるかどうかは不明である。2つの研究で400から600mgイブプロフェン（商品名：ブルフェン）が高所での頭痛を改善すると報告している。スマトリプタン（商品名：イミグラン、片頭痛治療薬）の効果については一定の見解はない。制吐剤は悪心、嘔吐に使用される。不眠に対しては治療が必要であるが、ダイアモックスは最も安全な薬である。高山病に対しては、沈静作用のある睡眠剤は呼吸抑制の危険があるので、ダイアモックスと併用する以外は使用を避けるべきである。ゾリプデン（商品名：マイスリー）は高所でも呼吸抑制作用はないので、高山病の患者にも安全と思われるが、臨床的には研究はされていない。急性高山病が改善した後も、さらに高所に行く場合は、予防的ダイアモックス服用の上、注意深くなさなければならない。

高山病のため、ベストの方法は、高所順応しながら徐々に登って行くことである。推奨するガイドラインは、海拔2500m以上では、睡眠を取る高度は24時間で600m以上上がらず、高所順応のために、この高さからは600から1200m上がるごとに1日余計に費やすべきである。例えば、3500mの高さに登るのに、1日で行くのに比較して、4日間かけてゆっくり登った場合には、急性高山病の発症率と重症度は41%減少する。多くのエキスパートが、一日で海拔3000m以上登ったのち、そこで睡眠をとる計画のある人や急性高山病の既往のある人は予防投与を受けることを推奨している。ダイアモックスが好まれるが、デキサメサゾンも代わりになる。両者とも明らかに効果がある。投与量は一定しない。反論はあるが、少量のダイアモックス（成人で125mgを一日2回）は、経験的には大量投与と同等の効果があり、副作用が少ない。しかし、効果の出る最低量は不明である。2つの研究では、Ginkgo biloba（イチョウ葉エキス）は5000mまで徐々に登る間の急性高山病を予防し、4100mまでの急速な登山においても、急性高山病の症状と発症率を50%減少させるとして

いる。頭痛についても、アスピリンの予防投与（325mgを4時間ごとに3回）で、発症率を50%から7%へ減少させる。いくつかの論文では、漢方薬も高山病を予防するとあるが、比較研究がない。水分負荷が急性高山病を予防するという説もあるが、化学的根拠はない。

《高所での肺水腫（high-altitude pulmonary edema）》

■臨床症状と診断

高所での肺水腫は、大部分の高所での死亡の原因である。急性高山病と同様に、肺水腫の発症率は、登る速度、到達した高度、個人の感受性と疲労度と関係する。感冒も危険因子である。心肺循環の異常も肺水腫の危険性を増す。肺水腫は、通常、新たな高度に到達した2日目の夜におこり、4日目以降というのは稀である。

初期での診断が重要である。行動が緩慢になり、空咳が出てくれば、肺水腫が疑われる。病状の後期になって初めて、ピンク色や血の混じった痰が出て、呼吸困難が現れる。休息時に脈や呼吸が早くなってきたら、肺水腫の進行が明らかである。起坐呼吸や血痰はあまり起こらない。中枢神経徴候や症状も起こり難い。高所での肺水腫の50%は急性高山病を起こし、14%は脳浮腫を起こしている。肺水腫の状態が悪化して死亡した患者で、解剖したうちの50%は脳浮腫を起こしている。発熱（38.5℃以上）は一般的である。肺雑音は、典型的には右側の腋下に始まるが、症状が進むにつれ両側に拡がる。表1に鑑別診断がのっている。

■治療と予防

下降、酸素投与、またはその両方を行うと、必ず治療は成功する。下降時の死亡は、さらに行動をすることで、心拍量と肺高血圧を増加させて肺水腫が増悪したことによる。スキーリゾートや他の施設では、休息させて48から72時間酸素を吸わせて治療する。パルス・オキシメーターでの動脈血酸素飽和度のモニターが良い指標となる。低かった動脈血酸素飽和度が高濃度の酸素投与5分以内で90%以上になる、または脳浮腫を合併しているような、重症の肺水腫の患者は、低地に移動させ、可能なら入院させるべきである。酸素投与が出来ない時には、下降させるか、Portable Hy

perbaric chamber (ガモフ・バック等)を使用するか、両方を行うかすれば、救命できる。ニフェジピン (アダラート) の投与は、酸素投与や下降ができないときだけ必要である (表2、3)。

最近の研究では、 β 刺激薬吸入 (気管支喘息の治療で行われる気管支拡張剤、商品名; サルタノール、アロテックなど) は、高所での肺水腫の予防や治療に有効かもしれないと報告している。少なくとも、この薬は安全で便利なので、使用を考慮すべきであろう。感染を合併している場合には抗

生剤が必要である。入院した場合には、空気呼吸で動脈地酸素飽和度が90%以上で、臨床的にもX線上でも改善してから退院すべきである。

高所での肺水腫の経験が、特に複数回ある場合には、よりゆっくり登り、早期に高山病の症状に気付くようにし、アダラートの予防的服用も考えた方がよい。もし、何回も肺水腫を起こしたり、2500m以下の高度で肺水腫を起こす場合には、何らかの心肺疾患があることを調べるべきである。

(New Eng J Med 345 (2); 107-114,2001)

上記論文に対する各コメントと著者の回答 [] 内が回答

1. ネパール国際クリニックのコメント

例年、ヒマラヤには大勢のトレッカーが来るため、高山病はよく見る疾患である。私達のクリニックでも、高所に来る旅行者達を治療している。そこで、この記事に対して以下のようなコメントがある。

①水分負荷よりも、脱水の方が、山では遥かに危険である。自分達のクリニックでは、尿が透明になる位に、水分を適量摂取するよう勧めている。

②呼吸器感染症が高所での肺水腫だけでなく急性高山病も起こし易くすると言われているのでトレッキングや登山の前に感冒やインフルエンザの症状のある人はより一層用心すべきである。

③ヒマラヤでは、私達は、前夜よりも400m以上高い高度で眠れなくなった人達に対して注意を払っている。記事の高度差600mというのは高すぎる。

④脳の自律調節は、高所での脳浮腫の発症と関連していると思われるが、私達の研究では、驚くべきことに、健康で高所に充分順応したシェルパでさえ、4300mの高度では脳の自律調節は損なわれていることが判った。

[脱水が急性高山病に対して悪影響を与えるという知見はまだ出ておらず、さらに水分投与しても高山病の進行は抑えられないという比較研究もある。登る速度に監視絵は、一日600mは、人によっては速すぎるかもしれないが、400mは少し遅いかもしれない。一般的なガイドラインを作る時に問題になるだろう。]

2. トロント、ウエスタン病院のコメント

この論文では、ダイアモックスが一日125mg、2回 (一日250mg) で高山病の予防にありうると言っている。が、引用文献では、そのような事は言っていない (Dumont et al; BMJ 321; 267-272, 2000)。この文献では、ダイアモックス一日750mgでは、偽薬に比べて効果があるが、500mgでは効果が充分ではない、と言っている。確かに、750mgの投与量は250mgと比較して、痺れや多尿の合併症をおこす可能性は高いが、250mgを勧める根拠はない。

[私達がDumontの文献を引用したのは、ただ低容量のダイアモックスの効果は不明ということについてだけである。ダイアモックスの至適投与量は、違う量を投与した比較研究をしなければ決められない。]

3. アメリカ、エール大学医学部のコメント

高所でのデキサメサゾンの使用はすっかり一般的になっており、確かに効果はあるかもしれない。しかし、高所でデキサメサゾンを中止した後に、重篤なリバウンドが起こりうることを考慮すべきである。幾つかの理由で、デキサメサゾンは、高所に登る直前や登っている間に使用すべきでないが、下降時の治療や低地に降りるのが遅れてしまった時のために持っておくべきではある。

アルパイン・スタイルでの登山では、高所へ短期間で登るために登山直前にデキサメサゾンを予防的に服用することがあるが、すぐに下山できない場合にリバウンドの危険がある。アルパイン・スタイルでの登山者は、低酸素血症で動けなくな

る前に下山することで、重篤な高山病にならないようにできるのである。デキサメサゾンの内服を続けることで、高所に耐えられる限度を数時間から数日延ばすことができたとしても、それは非常に危険をはらんだ方法である。

[デキサメサゾンは、ダイアモックスと同様に、高所での順応能力を伸ばすので、ルーチンで予防投与してはいけない。また、デキサメサゾンは高所での肺水腫は予防はせず、順応限界を上げるので死の危険も抑えられない。]

(表1) 高山病の鑑別疾患

急性高山病と高所での脳浮腫

- 急性精神障害
- 動静脈奇形
- 脳腫瘍
- 一般化炭素中毒
- 中枢神経系感染症
- 脱水
- 糖尿病性ケトアシドーシス
- 疲労
- 二日酔い
- 低血糖
- 低ナトリウム血症
- 低体温
- 毒物、ドラッグ、アルコール摂取
- 片頭痛
- てんかん
- 脳卒中
- 一過性脳虚血発作
- ウイルスや細菌感染

高所での肺水腫

- 気管支喘息
- 気管支炎
- 心不全
- 過換気症候群
- 痰詰まり
- 心筋梗塞
- 肺炎
- 肺塞栓症

4. アイルランド、ビューモント病院のコメント

この論文では、一酸化窒素の使用による高所での肺水腫の治療について述べていない。このような患者に一酸化窒素とともに酸素を投与すると、酸素単独投与に比べ、高い効果が早く出るので、重症例には使用する価値がある。

[一酸化窒素の高所での肺水腫における臨床的な効果については、酸素以上の利点は報告されていない。一酸化窒素と酸素の同時投与は、酸素単独に比較して、肺血管抵抗は下げるが、これを臨床応用した結果はまだ出ておらず、これを証明するには酸素に反応が悪い肺水腫の患者に実際に使用するしかない。]

編者注：昨年医学雑誌の中でも権威があるとされている「New England Journal of Medicine」の7月12日号に高所医学の権威であるハケットとローチがそのものずばり「高山病」の論文を発表。その後、10月25日号に「高山病」にたいする反響と、それに対するハケットとローチの回答が掲載された。今回掲載したのはその抄訳である。医療関係者以外には不要な部分はカットし、医療従事者以外にも理解しやすいよう注意している。

尚、薬品の使い方など、ここで掲載された内容は、医療関係者に向けてであり、副作用などの知識のあるものが対象である。次号で補足を行いません。

サルトロ・カンリ (7,742m) 1962年夏
隊長：四手井綱彦 19 , , 生 (56)
隊員：加藤 泰安 1911, 1,17生 (51) 83, 4,24
林 一彦 19 , , 生 (37)
斎藤 惇生 1929, 9, 9生 (33)
平井 一正 19 , , 生 (30)
谷 泰 19 , , 生 (28)
岩坪 五郎 19 , , 生 (28)
高村 泰雄 19 , , 生 (27)
前小屋 端 19 , , 生 (25)
上尾庄一郎 19 , , 生 (24)
パ側：A.H.ベグラ 4名
L/O：パシール・アーマッド・バッティ ()

表2 高山病の治療と予防

臨床症状	治療	予防
軽度の急性高山病 悪心、めまい、疲労を伴った頭痛が急速に高所に到達した12時間以内出現 (2500m以上)	500m以上の下降；休息を取り順応する；ダイアモックスを内服しながら順応していく；痛み止めや吐き気止めをのんで症状を抑える；これらの組み合わせ	ゆっくりと登る；中間の高さで夜を過ごす；2750m以上の高度に直接行かない；登る前日と高所に着いて2日間にはダイアモックスの内服 (125-250mを一日2回) を考慮する
中等度の急性高山病 重篤な悪心、めまい、疲労、不眠、水分貯留を伴った中等度から重度の頭痛が高所到達時間後約12時間以内出現	500m以上の下降；下降できなければ、ガモフバッグか酸素吸入 (1~2ℓ/分)；それでもできなければ、ダイアモックス (250mgを1日2回) かデキサメサゾン (4mgを経口か筋肉注射で6時間ごと) か両者を症状が消えるまで；痛み止めや吐き気止めをのんで症状を抑える；これらの組合せ	ゆっくりと登る；中間の高さで夜を過ごす；動き過ぎない；2750m以上の高度に直接行かない；登る前日と高所に着いて2日間はダイアモックスの内服 (125-250mを一日2回) を考慮する；早期に治療を行う
高所での脳浮腫 高所到達後約24時間以内に急性高山病、重度の疲労、精神的な混乱、運動失調	すぐに下降する；下降できなければガモフバッグ；酸素吸入 (2-4ℓ/分)；デキサメサゾン投与 (8mgを経口か筋肉か静脈注射で6時間ごと)；下降が遅れるようならダイアモックス内服	2750m以上の高度に直接行かない；ゆっくり登る；動き過ぎない；登る前日と高所に着いて2日間はダイアモックスの内服 (125-250mを一日2回) を考慮する；早期に治療を行う
高所での肺水腫 休息時の呼吸困難、痰がらみの咳、重度の疲労、嗜眠傾向、チアノーゼ、頻脈、呼吸数の上昇、肺雑音	酸素吸入 (状態改善まで4-6ℓ/分、その後2-4ℓ/分)；最低の労力ですぐさま下降するかガモフバッグ使用；それらができなければアデラート内服 (直ちに10mg、その後除放製剤を12-24時間ごとに30mg)；神経症状が悪化すればデキサメサゾン内服	ゆっくり除々に登る；動き過ぎない；何回も繰り返すようなら、アダラートの内服 (除放製剤を12時間ごとに20-30mg) を考慮する

表3 高山病の治療

投与	適応	投与量
酸素	高山病	最初は2-4ℓ/分、その後1-2ℓ/分が酸素飽和度90%を保つ量
ガモフバッグ等	高山病	機種による；最低2時間は2-4psi、その後は必要だけ
ダイアモックス	急性高山病の予防	登る前日と高所に到達した2日間は125-250mgを1日2回
デキサメサゾン	急性高山病の治療	250mgを1日2回、症状が消えるまで
	急性高山病の予防	2mgを6時間ごとか4mgを12時間ごと
	急性高山病の治療	4mgを6時間ごと、経口、筋肉注射、静注注射
	脳浮腫	最初に8mg、その後4mgを6時間ごと、経口、筋肉注射、静注注射
	急性高山病、脳浮腫	最初に8mg、その後4mgを6時間ごと、2回まで
	急性高山病の予防	80mgを12時間ごと、20-30mg経口で
	肺水腫の治療	徐放製剤を12時間ごと20-30mg経口で
	肺水腫の治療	直ちに10mg、その後除放製剤を12時間ごとに30mg
非ステロイド系消炎鎮痛剤	頭痛の予防	325mgを経口で4時間ごと、3回まで
アスピリン	頭痛の治療	400-600mgを経口で一回、繰り返してもよい
イブプロフェン	急性高山病の予防	80-120mgを一日2回、経口
Ginkgo biloba (イチョウ葉エキス)	吐き気、嘔吐	10mgを6-8時間ごとに経口か筋肉注射
プロクロペラジン		25-50mgを6時間ごとに経口、筋肉注射、座薬
(商品名；ノバミンほか)		10mg経口
プロメタジン		
(商品名；ピレチアほか)		
ゾルピデン	不眠	
(商品名；マイスリーほか)		

ヒマラヤ登山、日本隊50年の記録(3)

— 山 森 欣 —

II-3 京都大学のヒマラヤ

京都大学は戦前からヒマラヤ登山の実現に向けて活発に活動していた筆頭であった。しかし、カブルーやK2計画は挫折し、白頭山、大興安嶺などの遠征で、かろうじて探検・学術・登山を実現したのである。

戦後の混乱の中でも、京都大学の面々はスキー山岳部、自然史学会、生物誌研究会、AACKなどのグループが時差や人的繋がりがまさに九字のごとく絡み合い、ヒマラヤへの渴望を満たそうと動き出していた。

そしてマナスルの許可を獲得したにもかかわらず、御大今西錦司らの決断でマナスルは全日本的チームとの観点からJACへ移管されてしまった。その決定に公には反駁できないものの、九字に絡み合った面々の中には不満を露にする向きもあった。このような背景の上に、京都大学初のヒマラヤ登山が実現した。その舞台は、御大今西錦司が前年秋に試登したアンナプルナII峰(7,937m)であった。そしてそれ以降京大は怒濤のごとくヒマラヤへ押し寄せて行くのである。

II-3-1) アンナプルナIV(7,525m)1953年秋

きっかけは、JACマナスル登山隊の学術班に参加していた京大の中尾佐助が現地から送った手紙だったという。アプローチが短いことが魅力であった。受け皿はAACK(京都大学学士山岳会)となり登山が決定されたのは、JAC隊がマナスルで苦戦していた5月中旬のことであった。この頃は資金と装備・食糧の調達が大変であった。しかもこの隊には準備する時間がなかった。BC用の大型テントが間に合わず、マナスル隊使用でカトマンズにデポしてある物の借用をJACに依頼したが断られ、前年インド政府から不許可になった福岡山の会の名前の入ったテントを借りた、という話もあった。

隊長はその後マナスルの初登頂者となる今西壽

雄(38)。姓は同じであるが錦司と姻戚関係はない。当時、空の玄関口は羽田であった。(1978年夏以降から成田)沖縄、マニラ、バンコック、カルカッタまで飛行機。カルカッタ、ヴェナレス、ゴラクプール、国境の町ノータワンまで汽車。パイワラを経てプトワール・バザールまで車。ここからキャラバンの始まりであった。

隊はアンナプルナII峰とIV峰の南面を偵察したが、大障壁や雪崩の頻発のためこれを断念。北面へ転進した。時間的にII峰は無理だとした目標をIV峰に決定した。今西が6,000mの高みで30mの垂直の氷壁にピッケルを振るった。アタックのため今西、藤平正夫(30)と、ダナムギャルがC5に入った夜から強風が支配する世界となった。11月4日になった頃からナイロン・テントの一角が破れ始めた。そしてやがてテントは支柱と一片の布を残し全部あとかたもなく吹っ飛んでしまった。壮絶な撤退をもってAACK初のヒマラヤ登山は幕を引いたのであった。

II-3-2) パキスタン、日パ合同学生探検隊 ブリアン・サール(6,293m)1956年夏

1953年秋のAACK総会で今西錦司は、創立25年を記念して「カラコルム」登山を提案。シャチェン、バルトロ、ピアフォ、ヒスパー、シムシャル氷河を探検し、サルトロ・カンリ(7,782m)に登る計画などが話し合われた。しかし、これはいつの間にか「登山」抜きの「学術探検」の計画となりAACKの手を離れてしまう。マナスルと同じようにまたしても今西の「探検」が「登山」を凌駕したのである。1955年夏、「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」が派遣された。

探検隊が出発した頃、京大山岳部では「現役によるヒマラヤ遠征」が話し合われ始めた。先輩宅を訪れ助言を仰ぎ、今西や中尾を講師に招いて講座を開くうちに機は煮詰まり、1956年3月2日、日本で初めての探検部が京大に創立された。

アンナプルナⅣ (7,525m) 1953年秋

隊長：今西 壽雄 1914, 9, 生(39) 95.11.15

隊員：伊藤 洋平 1923, (30)

立平 宣雄 19

藤平 正夫 19 (30)

脇坂 誠 1924, (29) 82, 9, 5

藤村 良

L/O：ディリー

サーダー：ギャルツェン

HAP：7名

日パ合同学生探検隊

ブリアンサール(6,293m)1956年秋

隊長：藤田 和夫 19 , , 生()

隊員：本多 勝一 19 , , 生()

吉場 健二 19 , , 生()

パ側：A.H.ベグら3名

シャハーン・ドク(6,320m)1957年夏

隊長：松下 進 19 , , 生()

隊員：本多 勝一 19 , , 生()

荻野 和彦 19 , , 生()

岩坪 五郎 19 , , 生(22)

沖津 文雄 19 , , 生()

パ側：A.H.ベグら4名

チョゴリザ (7,668m) 1958年夏

隊長：桑原 武夫 19 , , 生(55)

隊員：加藤 泰安 19 , , 生(47)

藤平 正夫 19 , , 生(33)

山口 克 19 , , 生(32)

脇坂 誠 19 , , 生(32)

中島 道郎 1930, 9, 生(27)

平井 一正 19 , , 生(26)

高村 泰雄 19 , , 生(23)

岩坪 五郎 19 , , 生(24)

芳賀 芳郎 19 , , 生(23)

今川 好則 19 , , 生(25)

潮田三代治 19 , , 生(43)

L/O：アンワール・ワジー (28)

こうしてパキスタン、パンジャブ大学との合同による探検隊が派遣された。1956年は隊長、藤田和夫()、隊員は本多勝一()と吉場健二()二人とも学生であった。パキスタン側も隊長以下3名。探検隊は「山の一つも登ろう」と、バド・スワート氷河からブリアン・サールに近付いた。C2から本多が一人で上部へ向かったが氷河の状態が悪く前進を阻まれ登頂は断念しなければならなかった。

かってインド・ヒマラヤのガンゴトリ山群が解禁となり、シヴリンやテレィ・サガル、バギラティなどの写真を見た八木原罔明はそこを「インド・アルプス」と呼んだ。最近では、東チベットのニェンチェンタンラ東部を中村保は「チベット・アルプス」と呼んでいる。本多勝一もまた、この時ギルギットの先、ナルタル谷に入り、「ヒマラヤにアルプスがある」と書いている。

シャハーン・ドク (6,320m) 1957年夏

翌57年度の隊長は松下進(54)。隊員は本多勝一()、荻野和彦()、岩坪五郎()、沖津文雄()。パキスタン側も隊長以下4名。探検隊の登山の目標はチトラールの谷奥、マツツジ川上流にある。「岩の王様」と呼ばれているシャハーン・ドクである。本多、荻野、岩坪がC3上でピバークしてアタックしたが、頂上下で一度雪崩に巻き込まれ再度挑戦するも6,220m (6,150m)で登頂を断念した。

II-3-3) チョゴリザ(7,668m)1958年夏

学術探検隊でバルトロ氷河に入った今西錦司は、チョゴリザとバルトロ・カンリに魅せられる。一方、56年、57年と合同登山相手となったパンジャブ大学は、学術よりも「登山」に力点を置いていたようで、京大が「登山」を主体とした合同を持ち掛けたところ、パ大側は「ラカボシ」をパキスタンとしてどうしても登りたいとの申し入れがあったが、今西はラカボシではAACKが一度で登頂するのは困難と思いチョゴリザに絞られた。

登山隊長は桑原武夫(55)。副隊長には、55年のカラコルム学術探検隊に参加すべく送別会も済ませたが出発の4日前になって隊員となっていないことが判明して半月ばかり山籠りをしたという逸話を持つ加藤泰安(47)。隊員にはその後のA

AACKの中核となる藤平正夫(33)、中島道郎(27)、平井一正(26)、岩坪五郎(24)ら。学習院から松方三郎の申し込みで芳賀孝郎(23)が参加。

登山は、8月4日に藤平、平井が初登頂に成功した。5日には山口克(32)、中島、高村(23)がチョゴリザの南東にあるカベリ・ピーク(6,950m)の初登頂に成功し、AACK登山としては万々歳の成功であった。ところが、チョゴリザは頂上部分が台形状を成していて両端にある二つのピークの高さが同程度であるため、その後様々な論議を呼ぶこととなった。

京大隊が登頂したのは、「北東7,654m」のピークであった。対するもう一方のピークは「南西」にあり標高は7,550mを与えられていた。いずれが高いのかは登山者にとってもっとも大事な関心事である。AACKの報告書である『チョゴリザ』の座談会の中で、初登頂者の藤平隊員は「7,550の例の第Ⅱ峰というのですが、はじめこよりむこうが高いのじゃないかという気になったけれども、それはナイフ・リッジで、その上、雪がもぐりそうな感じで、遠くでもあるし、こっちが高いことにしておこう。地図でもこっちが高いことになっているのだから、こっちにしておこうというのでおりました。」と報告している。

その後、1975年8月2日に南西峰に初登頂したオーストリア隊は「ひいき目にみれば南西峰のほうが少し高い」という。1986年イギリス隊が南西峰から北東峰の縦走に成功したが、縦走の所要時間は4時間であった。(この記録を載せた「山岳年鑑'87」では北東峰7,654mに対して南西峰7,665mとなり南西峰が高くなっている)

ガッシャーブルムⅠ(8,068m)を1958年に初登頂したアメリカ隊の隊長であるニコラス・クリンチは、その著書『ヒドン・ピーク初登頂』のエピローグの中で「チョゴリザは日本隊によって登頂されたと述べた。当時はだれもがそう信じていたが、最近の学識者により、彼らが登った地点は、チョゴリザの頂稜上の最高点ではなかったことが明らかになった。最高点はその後の登山隊によって踏まれた。だが、われわれの友人である日本の登山家たちがチョゴリザを「初登頂した」と、われわれが今なお思い続けていることも、非難はさ

れないだろうと確信している。」と書き記している。

また、2002年6月27日に東京、マリオンで開催された「世界百名山」完結記念講演会で、白川義員はあえてチョゴリザの二つの頂上の高さについて触れ、氏が何枚も撮った写真(空撮)から判断して。「私は京大の登った峰の方が高いと思う」と話された。

「山の頂上とは？」との問いは何時の時代も登山者にとって重要な問題である。敢えてここで触れたのは今後もこのことは起きてくるからである。
Ⅱ-3-4 ノシャック(7,490m)1960年夏

戦前から「ヒマラヤ」に焦点を合わせてきたAACKは、チョゴリザ初登頂で勢いづいた。深田久弥をして「AACKのなんと余裕々々たることよ。」と感嘆せしめた。そのAACKは、折から迎える創立30周年を記念して「サルトロ・カンリ(7,742m)」に登山隊を派遣すべく準備に入り、併せてAACKの社団法人化を決議する。しかし、当然OKと考えていたサルトロ・カンリは、中国との国境問題が絡んで不許可となってしまった。

すぐに別の山を探した結果浮上したのは、ヒンズークシ未踏の最高峰「ノシャック」であった。ところがイタリア隊が一時は、パキスタン側から登頂したとのニュースが流れたが、それはサラグルールであった。京大隊はパキスタン側登山申請期限が過ぎていたので、アフガニスタンに申請を出した。今となっては全く幸運であった。なぜなら2002年の今、ヒマラヤ9ヶ国の最高峰で登山困難な山は、アフガニスタンのノシャックとブータンのガンカル・プンスム(7,570m)だからである。後者は未踏である。

隊長は、酒戸弥二郎(54)。実際に登山するのは広瀬幸治()、酒井敏明()、岩坪五郎(26)の3名である。他に吉井良三()、沢田秀穂()が参加。カブルーについて驚いたのは、ノシャック登山許可はおろか、ワハンへの入域も許可されていなかった。交渉の結果、登山許可は下りたがワハンは不許可。さらに驚きは続く。すぐ後にポーランド隊がノシャックの許可をもってやって来たのだ。それも12人。しかしこのメンバーは初めてのヒマラヤだった。それでも京大隊は同時登頂を目

指して合同登山を申し入れるが、ポーランド隊は順応に時間がかかるため、先に登頂することを承知する。酒井と岩坪は8月17日夕刻、岩屑に覆われた頂に立つ。初登頂であった。しかし、帰りはビバークとなり、クレバスの中で一夜を明かす。その時二人のほかに誰かもう一人いるような気がする。それはC4に帰りついても続いたという。

1985年12月、たった二人で冬のマナスル登頂に成功した山田昇(35)、斎藤安平(32)も同様な経験をし、山田は『岩と雪116号』で「自分がトップで登っているのはわかりきっているのに、どうしても前に人がいるように思えた。斎藤に聞くと、私と彼の間にもう一人登っている感じがしたと書いていた」と書いている。『ビヨンド・リスク』の中でポーランドを代表するヒマラヤニストのヴォイテク・クルティカも、ガッシャーブルムIV(7,982m)西壁をスイスのロベルト・シャウアーと二人で登った折り、死を直視したその時「3人目の人間がいるのを感じ、それが生還につながった、という趣旨のことをインタビューで答えている。

極限の中で研ぎ澄まされた神経がそのような世界を覗き見るのか、はたまた幻想か。いずれにしても下界ではなかなか体験できないことではある。

II-3-5) サルトロ・カンリ(7,742m)1962年夏
不許可になっていたサルトロ・カンリは、再三の申請にも不許可。待っているだけでは罅が開かない。マナスルの時と同じく現地人に人を派遣した。山もガッシャーブルムIIIやキンヤン・キッシュも申請する。そんな折り時の首相である池田隼人がパキスタンを訪問することになった。池田は京大出身である。このルートを通じて直接アユブ・カーン大統領にサルトロ・カンリの許可を頼むことにした。それが見事に効を奏し許可が下りた。

隊長は今西、桑原と同期の四手井綱彦(56)、北岳の冬期初登頂者でもある。隊員はマナスル、チョゴリザについてヒマラヤ3度目の加藤泰安(50)、斎藤惇生(33)、平井一正(30)ら9名。パキスタン側が先の日パ合同隊で緑のあるアブドル・ハミッド・ベグ隊長ら4名。隊員の2名は新聞で募集したという。

7月23日、斎藤、高村泰雄(27)、ラジャ・パシー

ル・カーンの3名は、7,000mのC5をワカンをつけて出発。途中ワカンをデポした。そしてジャンダルム上の7,400m地点でツェルト・ビバーク。翌日腰まで潜る雪をラッセル。雪の小さなドームが頂上だった。斎藤は頂上に隊員の家族が集まった時の記念写真を埋めた。登山経験もない新聞広告で隊員になったパキスタン人が7,400mのビバークに耐えて自国の巨峰に初登頂した。しかも、国やクラブのためでなく自分の心からの願望で。

II-3-6) インドラサン(6,221m)1962年秋

京大にあるのはAACKばかりではない。山岳部、探検部もある。その山岳部がインドのインドラサンに挑戦することになった。当初は、春を予定していたが、サルトロ・カンリと競合するのを避けて秋にした。隊長は小野寺幸之(51)、副隊長は酒井敏明(29)。隊員は大野義次(22)、富田幸次郎(22)、田中二郎(21)、岩瀬時郎(21)、宮木靖雅(21)の5名。南面から挑戦。スノープラトウに出ると眼前に南壁が聳えている。10月13日、富田、宮木が前日の失敗を乗り越えて初登頂に成功。帰途ビバークとなった。この隊も学生を主体としたものであったが、前述の日パ合同の2隊も含めてみると、この時代の若い世代では京大が頭抜けていたことを感じざるを得ない。

外貨の不足していた時代もあって、大学系、学術系が優先するという時の環境も彼等には有利に働いていたことは当然であった。しかし、今でも「海外登山は他人の金でやる」なんてことにはなっていないと信じていたい。

II-3-7) アンナプルナ南峰(7,219m)1964年秋

山岳部の若手が広くネパールを歩きたい、との発想がカンジロバ〜ダウラギリIV〜アンナプルナ南峰(当時ガネッシュ)と目標の山は変わったが学生主体で実現した。隊長は樋口明生(35)、隊員は上尾庄一郎(25)、吉野熙道(23)、木村雅昭(22)、島田喜代男(22)、上田豊(21)。アンナプルナ内院の4,000m地点にBC建設。高度差3,200mを克服して10月15日上尾とミンマが初登頂。13日に吉野、木村、上田が中央峰に初登頂。立派な記録である。

ロー・マンタンの空、遙かなり(4)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

高橋 照

ブリクティ・サイル登山隊員のこと

1982年4月11日、私は日本山岳会会長の佐々さん一行と東京を発った。佐々さんのグループはランタン谷のトレッキングである。私も最初は行を共にする予定でいた。それは菊地君が2ヶ月程前にカトマンドゥ入りをし、ブリクティ登山のムスタン・ルートの許可を取りつけるため奮闘をしていたからである。それにはかなりの時間がかかるものと私は判断していた。ムスタン地域は全くモンスーンの影響を受けない地域なので、登山時期特にムスタン地域の調査には6、7、8、9月の4カ月が最も良い季節だからである。私は暫く山から遠ざかっていたので、ランタン谷行のトレッキングはウォーミング・アップとしては最適だと思っていた。

私がカトマンドゥに着くと、菊地君はつい2、3日前ムスタン・ルートが許可になったので、10日以内にはカトマンドゥを発ちたいという。許可期間も6月20日迄であった。

そこで私は、佐々さんと一緒に行く予定のランタン谷行きを中止して、ブリクティ登山隊に加わるようになった。菊地君がブリクティのマナン側ルートを偵察に行き、カトマンドゥに戻って幾日も経っていない。彼はマナン・ルートもナウルなどはほとんど人が入っていないのでなかなか面白い地域ですよといていた。何でもナウルに住んでいるボテ・グルンの話では、毎年チベットより岩塩を持った交易者達が沢山来るのに、今年は何うした訳か未だ一人も来ないということだ。彼等ボテ・グルンの話だと、チベットに何か異変が起こって不穏な動きがあるのではないかといっていたそうだが、日本で耳に入った情報でもチベットのチャンタン地方及び、それより西のウイグル地区で、大きな武斗があったということを知って

いたので、何か辻褄が合いそうな気がした。

ブリクティ登山隊は4月23日カトマンドゥをバス1台とトラック1台で出発した。サーダーと高所ガイドは全くなしである。サーダー代わりにチャングマのニマ・トゥンドップというコック1名、マイル・ランナー2名の計3名がついた。もう既に登山期間が外れていたもので、プレ・モンスーン期のすべての遠征隊は出発してしまった後であった。その代わり仕事にあぶれたカトマンドゥにたむろするシェルパ達を約50名程ポーターとして使うことにした。当然その中には高所装備を持っているシェルパが沢山いたので、その中でも質の良い者だけを高所に上げる要員にする予定でいた。荷物の都合で不足分のポーターはボカラで80名程雇用するつもりであった。

メンバーはリエゾンを入れると15名である。このうち、登山隊は菊地薫隊長を含めて6名である。あとはTBSカメラマンの寺田捨巳さん、それにオーディオ・スタッフの新妻勲さん、中里雅行さんの計3名、そして大正大学のチベット語の助教授の金子英一さんである。寺田さんは取材でエベレストに遠征隊と一緒にいった経験の持主で、金子さんはチベット語の研究で各国に行っており、ネパール、インドにも調査で過去何回も行った実績をもっている。昨年はチベットのラサにも2度め調査旅行に行っており、最近『チベットの都、ラサ案内』という本も執筆されている。

ところで、今回の遠征ではジョイント・エクスペディションでないとネパール政府の許可が取りつけられないので、ネパール側から2名のジョイント・メンバーがトリブブヴァン大学から参加した。今迄一般にジョイント・エクスペディションの場合形式的にネパールに国籍のある者なら良い

▼ポーターをチェックするキショール隊員



とし、普通シェルパが参加し、一応形式的な辻褃だけは合わせていた。しかし今回のジョイント・メンバーはトリブーヴァン大学山岳部の部員で、ジョイントの意義を充分に発揮してくれた。まずそのネパール・メンバーの紹介を始めよう。

[タシ・ジャンブー・シェルパ (24歳)]

彼はシェルパ族ではあるが、一般的にいわれている職業シェルパではない。彼の家は、ナムチェ・バザール一番の大金持ちで大学院の学生で測量学を専攻している。カトマンドゥの高級住宅地カマラディの立派な大きな家に住み、使用人2人を使っている大学生である。山登りが非常に好きで、そのため毎朝2時間ぐらいのジョギングをやっている。イタリーのエベレスト隊のメンバーになったり、マカルーのリエゾン・オフィサーをやっている。キショール・バットライとともにマナンの登山学校を出ている。

[キショール・バットライ (28歳)]

氏名のとおりブラーミンである。彼もトリブーヴァン大学山岳部のOB部員で、現在ライジング・ネパール新聞社に勤めている社会部の新聞記者である。その他ネパール・スカウト (ネパールではボーイ・スカウトとガール・スカウトが一つである。)の仕事も兼任していてネパール人には珍しいくらい多忙な男である。数年前ハーマン・ドースという英国の学者とムスタンに入り、6カ月も滞在して調査活動を行っている。タシと同様英語が抜群にすぐれ、二人共なかなかの紳士である。ネパール人で6カ月もムスタンに入った男はそんなにいないだろう。

[ケサン・ナムギャル (42歳)]

彼はメンバーではないが客分として参加した。私は十年ほど前から知っている人だが、彼の数奇な経歴についてここにご紹介しよう。ケサン・ナムギャル氏の両親は、チベットのカム地方出身の貴族の出で、その後、ラサに住むようになった。1959年ダライ・ラマが中国に侵攻されインドに亡命したことは周知のことである。彼はダライ・ラマのインドへの亡命前3年ぐらい前に、インドのダージリンの英国系のハイ・スクールで勉強していた。その後チベットのラサは中国軍に占領され一族はチリチリになってしまった。当然のことだが学費は途絶えてしまい、ラサに帰ることも出来ない。彼はアルバイトをしながら、英国系の大学を卒業した。彼の英語が完璧なキングズ・イングリッシュなもののためであろう。

彼は大学を卒業後住居をカトマンドゥに移した。その時、彼の住居と同じ一つの門の別な建物に、カトマンドゥのカレッチに通学している一人の西藏人女性とめぐり会った。当然のことながら二人に恋がめばえ、彼女がカレッチを卒業してから結婚にゴール・インした。ケサン氏の今の奥さんがその人である。ケサン氏の奥さんは先代のムスタン国王の娘で、所謂王女である。したがって、ケサン氏は今のムスタン国王の義弟になるわけだ。ケサン氏の家系も、カム出身なのでムスタンとも色々に関わり合いがあったようだ。そんなことから、同じような境遇にある二人の恋は急速に進んだらしい。彼女の姉さんの第一王女の方は、カトマンドゥでムスタン・ホテルを経営する西藏人のケサン・タシの奥さんである。私は2回程ケサン・タシさんの家に招かれて、チベット事情について色々聞き出したことがある。彼はネパール語が不得意なので、その時インドラ・マン・シュルチャン氏に通訳して貰ったことを覚えている。

ケサン・ナムギャル氏は数回来日している。そのほとんどが、日本の学術振興会や東洋文庫の招きで来日しているようだ。彼は日本でも5、6冊のチベット語やムスタンの歴史に関する報告書を東洋文庫や大学で発行しており、特にチベット語のラサ方言とロー方言 (ムスタン語) の比較相異のリポートも出している。表題を見ると奥さんの名前も印刷されているので、夫妻で執筆したものの

のようだ。兎に角、ラサ方言とロー方言の比較の論文は、恐らく世界にこれ以外はないだろう。又、日本に於いては東京外語大学、大正大学、国士館大学等で講師としてチベット語の講義をしばしば行っている。来年は、筑波大学の講師も予定されているようである。

翌日4月24日にはポカラを120名のポーターと共にスタートした。ヒマラヤン・ホテルの主人、チベット人のケサン・アムドゥに旅の安全を祈るカダを肩にかけて貰い、一番後からホテルを出た。少し行ったマヘンドラ・ナガルのバザールで隊員達がタクシーを待っていたので、私も一緒に行くことにする。

見なれたポカラのバザールを過ぎ、間もなく旅の出発点であるハイスクールのある広場に出た。広場の外れのベンガル菩提樹の茂るチョータラよりはトラック道に沿って進み、立派な橋を渡って対岸に出た。橋は今迄よりはかなり奥で、それだけ自動車道が延長されたことになる。もう少しでチベタン・キャンプや、ヤンザまでトラック道が通じることになるだろう。

チベタン・キャンプ前のヒマラヤン・ホテルのケサンの経営しているレストランに、TBSのメンバーが休んでいたの、未だあまり腹はすいていないが昼食とすることにした。ポカラのヒマラヤン・ホテルと同じメニューだが、半分以上は名前だけで出来ない。それでも私には、バッティのダル、タルカリよりはましであった。のんびりしたヤンザの集落を過ぎる頃、交易のカッチャルのキャラバンに会う。カッチャルは所謂ラバであってネパールの僻地、特にボテ圏に行くと、物資の輸送機関として欠かせない家畜だ。英語では一般にドンキー（Donky本当はHinny）又は、ミュール（Mule）といている。しかし、これらラバを使っている地域では、ネパール人もボテもタカリも皆一様にカッチャル（Khachhar）と呼称している。一体何処の言葉名なのだろうか？。

カッチャルはKhachharでウルドゥ語からヒンディ語になった言葉で、ネパール語でもチベット語でもない。ムスタンでもカッチャルとヒンディ語を使っている。カッチャルはパキスタンやアフガニスタンが原産の家畜で、雄ロバ（Poniy）と

▼ケサン・ナムギャル氏



▲TBSスタッフ



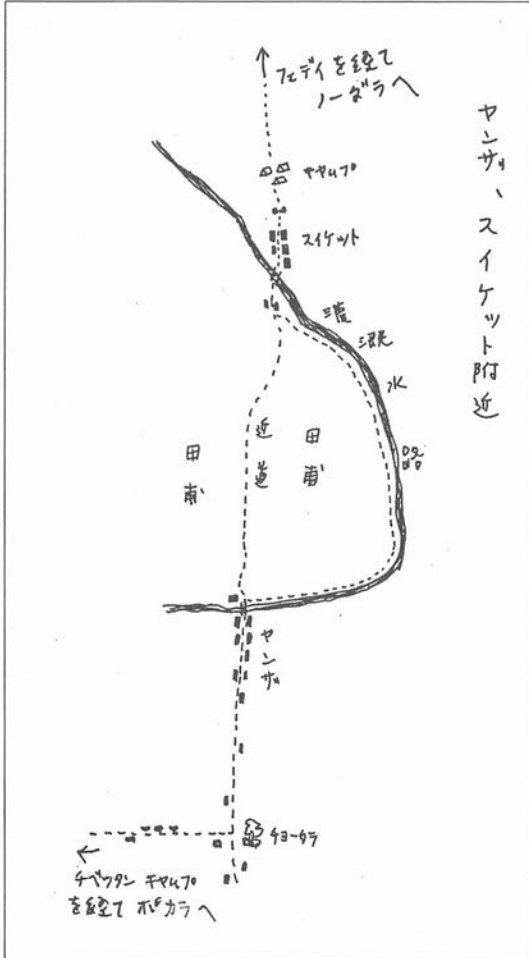
▲カッチャルの隊商

▼バウンの農家



雌馬を掛け合わせたもので、英語のHinny又はMuleである。よく粗食にたえ、重量物を運搬し、性質が穏順なため、ポテ圏のゾプキョ同様便利な有用な家畜である。ラバもゾプキョも一代かぎりである。

ヤンザの外れのバッチィでジュースを飲んでいると、ポカラ方面からジープが客を満載してやっ



て来た。バッチィで聞いたところ、ポカラから本日宿営予定地のスイケットの1時間先のノウダラの登り口のフェディまで、毎日数回往復しているそうだ。代金は一人20ルピーだそうだ。ポカラで知っていたならジープに乗れば良かったなあと悔やまれる。時間にして、歩けば一日の距離だが、2時間半弱で行ける。ただし河原を走るので、乾期だけしか運行していない。ジープのターミナルはポカラ・バザール外れのハイスクールの広場だが、1台200ルピーでチャーターすれば、ポカラ空港まで来てくれる。このジープを利用すれば、ポカラからノウダラの日帰りも現在ではそう難しくない。

ヤンザでは、バウンの女二人が、竹の棒で麦の脱穀をしていた。その昔からのしきたりで、こんな非能率的な脱穀をいまだに踏襲しているのだろう。それに反し、ポテやタカリは回転するカラ竿(西藏語でゲルッ)で脱穀しているので、はるかに能率的である。バウンはヒンドゥのブラフマンのネパール語で、この辺にもほかの民族とともに混在している。バウンの農家は一般のネパール人の農家と違い楕円形に日干煉瓦を組上げて建てられ、藁ぶき屋根の家が普通なので直ぐ判る。しかし最近ではネパール式の建物に変わりつつある。

本日は先が見えているので、ヤンザのバッチィで一時間以上も休んで出発する。今は乾期なので河原に作られた乾いた水田の中を真直ぐに進む。前方にスイケットの集落が望見されるじぶん、アンナプルナ連山の一角に雷鳴が轟き、あたりは真暗になって来た。毎日の定期便の驟雨の前触れである。このポカラ周辺は近くにアンナプルナという高い山群が立ち並んでいるので、天候の変化が激しい。昨日もポカラでは大雨が降り雷が2時間以上も鳴り続いた。雨傘を梱包に入れっぱなしなので雨具がない。私は急ぎ足でスイケットに向かった。雷鳴と共に大粒の雨がパラつき出す頃、スイケットの部落に入った。村外れの藁小屋の茶屋の向こうに、色とりどりの天幕が張られ、炊事場よりは紫煙は上がっていた。隊員やポーター達は夕立に備え、荷物にシートを掛けたり、天幕の位置を移動したり、ひとしきり喧騒が続いたが、それもおつかの間、美しい虹が中天に高く懸けられた。

地域ニュース

《インド》

日印合同隊 パドマナブに初登頂

日本山岳会とインドが合同で挑戦していた東部カラコルムの未踏峰、パドナブ(7,030m)に、6月25日、坂井広志()、棚橋靖()の2名が初登頂に成功した。尚、同隊はインド側からカラコルム峠(5,575m)に到達した。「峠に至るルートには、いまだに馬などの白骨が点々。先人の苦勞をしのびました」と坂中隊長は報告している。

《中国》

日中女子合同隊がチョー・オユーへ

日本山岳会では、今秋チベット登山協会と合同でチョー・オユー(8,201m)に女性合同登山隊を派遣することで合意した。日本側は橋本しをり(49)隊長、恩田真砂美(35)、井出里香(39)ら6名。チベット側はグイサン(45)、ジジ(32)、ラジ(33)ら6名。登山期間は8月6日～10月20日の予定。

ヒマラヤから

カラコルム便り

アッササム・ア・レイコム!

皆様いかがお過ごしでしょうか? 私達、カラコルム連続登山隊は、なんとか無事に出発致しました。岩崎隊長は6月8日先発で出発。田辺、野沢井、後藤の3名の本隊は6月10日P I Aにて出発致しました。

計画ではバルトロ・カンリ～チョゴリザでしたが、やはりバルトロ・カンリの許可はクリアできず、代替えの山としてG Iを申請致しました。ロイヤリティーの不足分を支払い、許可は私達の出発後に追い掛けて到着するという事で決着しました。

猛暑のイスラマバードでの準備も何とか終り、大量のビールの入手も出来、6月13日出発しまし

た。夜行のローカルバスです。このバス私達がバス・ステーションに着いた時は、すでに大量の荷が屋根の上ののっていたが、私達の荷物も無事にのせることが出来ました。翌日、朝スカルド着の予定は予想通りパンクなどのアクシデントで夕方になりました。いつものインダスマートルに落ち着き、登山の最終準備を行いました。(野沢井)

夜行ローカルバスは27時間かかり、南京虫のオマケ付きでした。翌6月15日スカルドで買い出しと梱包をすませ、16日ジープでスカルドからアスコレへ移動しました。道路の崩壊は1ヶ所のみでまったく問題ありませんでした。17日キャラバン開始、雨の中ジュラへ移動。18日ジュラからパイユへ。19日パイユ休み。ヒマラヤン・グリーンクラブが植林したポプラは順調に育っていました。ただ1997年以降、新たな植林はしていないようでした。(我々のチェックが甘いだけかも) 20日パイユよりホブルツェへ。夏のバルトロの下の方というのにミゾレの中のキャラバンでした。21日ホブルツェよりウルドカスへ。22日ウルドカスよりゴレへ。22日より好天期に入り、快適なキャラバンを楽しんでいます。上部はかなりの深雪のようで早々とあきらめたブロード・ピーク隊の連中が下ってきています。(田辺)

23日ゴレII～シャクリン 今回は暑くなく寒くなく新しいアプローチでした。ここ迄来ると高度の影響出てきて……です。でもウィスキーはうまい。明日はBC入りです。(岩崎)

97年以來のバルトロでなつかしい思いです。先輩方におくれをとらず頑張ってます。戦争の影響もなく順調に進んでいます。(後藤)

97はメロメロでまったくバルトロ街道の記憶が飛んでましたが、今回は調子もまずまずカラコルムの名峰・岩塔群を満喫しています。これから登山本番ですが、早くケリを着けてマリービールで乾杯をあげたいです。我々の小さなメスレントには、5人目の隊長奈々子changが暖かく見守っております。(歩)

今回なぜかカンビールが買えず(売ってなかった)スカルドゥ迄しかビールが飲めず、アスコレからは、毎日1本ずつウィスキーが消えていま

す。ビ、ビールが飲みたい。 (洋)
 明日はG I B Cです。 シャクリーンにて
 23 Jun.02 H A Jカラコルム連続登山隊

創立35周年記念行事資金協力者

(2002.7.15 現在)

- [30口] 山森成一
 [10口] 鈴木雄一、八木原罔明、
 [5口] 岩崎洋、遠藤登、尾形好雄、樋上嘉秀、
 [3口] 天城敏彦、井上功、植松秀之、小島守夫、
 吉原和美、匿名2名、中岡久、名塚秀二、
 長谷川和雄、東野良、森山安次、山田昇ヒ
 マラヤ資料館、
 [2口] 青木正樹、大内論文、国沢鎮雄、小松樹、
 佐藤英樹、田村正勝、戸部秀男、平田清志、
 松館正義、宮崎久夫、山田豊、
 [1口] 植竹清孝、浅野勝己、江尻健二、青木茂、
 内田嘉弘、生玉道雄、沖允人、植木知司、
 梅山義弘、遠藤清夫、小野寺斉、加藤智司、

国重光熙、倉澤保男、小林正己、斎藤繁、
 斉藤義孝、笹原芳樹、沢田幸子、澤村幸蔵、
 関根孝次、関根孝、佐藤邦彦、渋谷眞一、
 鹿田雄三、下田泰義、鈴木昭、高橋敏雄、
 田淵一、田邊卓司、中島俊弥、中村正勝、
 名越實、貫田宗男、中村保、名村義人、西
 本武志、沼田敏彦、古川英勝、日向野恵美
 子、日南長二郎、藤田弘基、牧久真子、増
 山茂、守屋益男、宮崎勉、南勲、吉田和宏、
 柳稔、山岸和男、渡邊雄二、

81名、1団体 合計1,820,000円

東京集会のお知らせ

日 時 8月26日(月)午後7時～
 内 容 暑気払いです
 場 所 H A Jルーム(地下鉄有楽町線東池袋下
 車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早
 稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前
 方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

2003年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを探して

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ(夢)を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央峰に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちもそこが「8,000m」の標高を与えられてい

るからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。今後中央峰の標高が8,000mを切ることも考えられる。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的に困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えている。意欲ある岳人の参加を期待する。

記

1. 時期 2003年9月10日～11月8日(60日間)
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

■8,000m峰

トータル獲得標高2001

(トップ50 2001.12.31現在 山森欣一作成)

氏名前の×は死亡 ★=日本人初登頂 ●=無酸素(8,500m級) ↓登頂後帰路死亡

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
01	×山田 昇 Yamada Noboru 1950.2. 生 9座12回 (101,073m) 冬期3回 初登攀2回 HAT2回 無酸素2回 冬期AP1回	1.ダウラギリI	8,167	1978.10.21	南東稜
		2.カンチェンジュンガM	8,586	1981.5.5	南西面
		3.ダウラギリI	8,167	1982.10.18	北西稜初登攀
		4.ローツェ	8,516	1983.10.9	西面 ★
		5.サガルマータ	8,848	1983.12.16	冬期第三登
		6.K2	8,611	1985.7.24	南東稜 ●
		7.サガルマータ	8,848	1985.10.30	南東稜 ●
		8.マナスル(AP)	8,163	1985.12.14	冬期第二登 HAT-T
		9.アンナプルナI	8,091	1987.12.20	南壁冬期初登攀
		10.チョモランマ	8,848	1988.5.5	北→南へ初縦断
		11.シシャパンマM	8,027	1988.10.24	北東稜
		12.チャー・オユー	8,201	1988.11.6	北西面 HAT-T
02	名塚 秀二 Nazuka Hideji 1954.11. 生 9座10回 (83,442m) 冬期1回 初登攀1回	1.サガルマータ	8,848	1985.10.30	南東稜
		2.チャーゴリ	8,611	1990.8.9	北西壁下部初登攀
		3.カンチェンジュンガM	8,586	1991.5.24	北東支稜
		4.チャー・オユー	8,201	1993.10.8	北西面
		5.サガルマータ	8,848	1993.12.18	冬期南西壁初登攀
		6.ガッシャーブルムI	8,068	1997.7.7	北稜
		7.ガッシャーブルムII	8,035	1997.7.14	南西稜
		8.シシャパンマM	8,027	1999.10.29	北稜
		9.ブロード・ピークM	8,051	2000.7.29	西稜
		10.ダウラギリI	8,167	2001.10.11	北東稜
03	尾崎 隆 Ozaki Takashi 1952.9. 生 7座8回 (67,483m) 冬期1回 初登攀1回	1.ブロード・ピークM	8,051	1977.8.8	西稜 ★
		2.チョモランマ	8,848	1980.5.10	北西壁下部初登攀
		3.マナスル	8,163	1981.10.12	北東面
		4.ローツェ	8,516	1983.10.9	西面 ★
		5.サガルマータ	8,848	1983.12.16	冬期第三登
		6.カンチェンジュンガM	8,586	1984.5.19	南西面
		7.シシャパンマC	8,008	1986.9.10	北東稜
		8.マカルー	8,463	2001.5.12	北西稜
04	田辺 治 Tanabe Osamu 1961.1. 生 6座7回 (58,410m) 冬期1回	1.ガッシャーブルムII	8,035	1990.7.26	南西稜
		2.ブロード・ピークM	8,051	1993.8.24	西稜
		3.チャー・オユー	8,201	1993.10.11	北西面
		4.サガルマータ	8,848	1993.12.20	冬期南西壁 HAT-T
		5.マカルー	8,463	1995.5.21	東稜下部初登攀
		6.K2	8,611	1997.7.19	西壁上部初登攀

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
	初登攀2回	7.チョー・オユー	8,201	2001.10.9	北西面
04	山本 篤 Yamamoto Atsushi 1962.10. 生 6座6回 (50,313m) 初登攀1回	1.シシヤパンマM 2.チョー・オユー 3.サガルマータ 4.マカルー 5.K2 6.マナスル	8,027 8,201 8,848 8,463 8,611 8,163	1988.10.24 1988.11.6 1989.10.13 1995.5.21 1996.8.14 1997.10.8	北東稜 北西面 南東稜 東稜下部初登攀 南南東リブ 北東面
06	谷川 太郎 Tanigawa Taro 1967.6. 生 6座6回 (49,947m) 初登攀1回	1.ブロード・ピークM 2.ガッシャーブルムII 3.マカルー 4.K2 5.カンチェンジュンガM 6.チョー・オユー	8,051 8,035 8,463 8,611 8,586 8,201	1991.7.12 1993.7.22 1995.5.22 1996.5.22 1998.5.15 1999.9.28	西稜 南稜 東稜下部初登攀 南南東リブ 北面 HAP無し 北西面
07	石川 富康 Ishikawa Tomiyasu 1936.11. 生 6座6回 (49,422m) 全て50歳代上	1.チョー・オユー 2.サガルマータ 3.ダウラギリI 4.シシヤパンマC 5.マナスル 6.ガッシャーブルムII	8,201 8,848 8,167 8,008 8,163 8,035	1991.9.28 1994.5.13 1994.10.1 1995.9.26 1996.9.27 1998.7.22	北西面 54歳 南稜 57歳 北東稜 57歳 北東稜 58歳 北東面 59歳 南西稜 61歳
08	近藤 和美 Kondo Kazuyoshi 1941.11. 生 6座6回 (49,401m) 全て50歳代	1.チョー・オユー 2.シシヤパンマC 3.ダウラギリI 4.チョモランマ 5.ナンガ・パルバット 6.ブロード・ピークM	8,201 8,008 8,167 8,848 8,126 8,051	1992.9.20 1994.5.18 1995.10.6 1998.5.22 1999.7.29 2000.7.30	北西面 50歳 北東稜 52歳 北東稜 53歳 北稜 56歳 西面 57歳 西稜 58歳
09	小西 浩文 Konishi Hirobumi 1962.3. 生 6座6回 (48,530m)	1.シシヤパンマC 2.ブロード・ピークM 3.ガッシャーブルムII 4.チョー・オユー 5.ダウラギリI 6.ガッシャーブルムI	8,008 8,051 8,035 8,201 8,167 8,068	1982.10.10 1991.7.30 1993.7.31 1995.5.9 1997.5.31 1997.7.16	北東稜 20歳 西稜 南西稜 北西面 北東稜 北稜
10	×三枝 照雄 Saegusa Teruo 1957.10. 生 4座5回 (42,015m)	1.サガルマータ 2.アンナプルナI 3.チョモランマ 4.シシヤパンマM 5.チョー・オユー	8,848 8,091 8,848 8,027 8,201	1985.10.30 1987.12.20 1988.5.5 1988.10.24 1988.11.6	南東稜 南壁冬期初登攀 北稜 北東稜 北西面 HAT-T
11	三谷 統一郎 Nitani Toichiro 1958.3. 生 5座5回 (41,965m)	1.ダウラギリI 2.カンチェンジュンガM 3.チョー・オユー 4.サガルマータ 5.マナスル	8,167 8,586 8,201 8,848 8,163	1982.10.17 1984.5.5 1985.10.3 1989.10.13 1997.10.8	北東稜 南西面 南峰～中央峰縦走 北西面 ★ 南東稜 北東面

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
12	尾形好雄 Ogata Yoshio 1948.7. 生 5座5回 (41,640m)	1.ヤルン・カン 2.チョー・オユー 3.サガルマータ 4.ガッシャーブルムⅡ 5.ブロード・ピークM	8,505 8,201 8,848 8,035 8,051	1981.5.9 1993.10.8 1993.12.22 1997.7.8 1997.7.20	南東面 ★ 北西面 冬期南西壁 南西稜 西稜
13	江塚進介 Ezuka Shinsuke 1961.4. 生 5座5回 (41,203m)	1.ブロード・ピークM 2.チョー・オユー 3.サガルマータ 4.ガッシャーブルムⅠ 5.ガッシャーブルムⅡ	8,051 8,201 8,848 8,068 8,035	1993.8.24 1993.10.11 1993.12.20 1997.7.7 1997.7.14	西稜 北西面 冬期南西壁 HAT-T 北稜 南西稜
14	倉橋秀都 Kurahashi Hidetoshi 1960.2. 生 5座5回 (41,196m)	1.シシヤパンマC 2.チョモランマ 3.ナンガ・パルバット 4.ブロード・ピーク 5.マナスル	8,008 8,848 8,126 8,051 8,163	1994.5.18 1998.5.18 1999.7.27 2000.7.26 2001.10.9	北東稜 北稜 西面 西稜 北東面
15	×星野龍史 Hoshino Rushi 1967.11. 生 5座5回 (41,179m)	1.チョー・オユー 2.サガルマータ 3.ガッシャーブルムⅠ 4.ガッシャーブルムⅡ 5.シシヤパンマM	8,201 8,848 8,068 8,035 8,027	1993.10.8 1993.12.22 1997.7.7 1997.7.14 1999.10.29	北西面 冬期南西壁 北稜 南西稜 北東稜
16	後藤文明 Goto Fumiaki 1965.5. 生 5座5回 (41,162m)	1.チョー・オユー 2.サガルマータ 3.ガッシャーブルムⅡ 4.ブロード・ピークM 5.シシヤパンマM	8,201 8,848 8,035 8,051 8,027	1993.10.8 1993.12.18 1997.7.8 1997.7.20 1999.10.29	北西面 冬期南西壁初登攀 南西稜 西稜 北東稜
17	宮崎勉 Miyazaki Tsutomu 1947.11. 生 5座5回 (40,987m)	1.ダウラギリⅠ 2.ローツェ 3.チョー・オユー 4.ガッシャーブルムⅠ 5.ガッシャーブルムⅡ	8,167 8,516 8,201 8,068 8,035	1978.10.19 1983.10.10 1993.10.12 1997.7.9 1997.7.14	南東稜初登攀 西面 北西面 北稜 南西稜
18	北村俊之 Kitamura Toshiyuki 1962.8. 生 5座5回 (40,613m)	1.ブロード・ピークM 2.ダウラギリⅠ 3.ガッシャーブルムⅠ 4.ナンガ・パルバット 5.チョー・オユー	8,051 8,167 8,068 8,126 8,201	1995.7.19 1997.5.31 1997.7.16 1998.8.5 1999.10.1	西稜 N~Cから縦走 北東稜 北稜 西面 北西面
19	×加藤保男 Kato Yasuo 1949.3. 生 (34,707m)	1.サガルマータ 2.チョモランマ 3.マナスル 4.サガルマータ	8,848 8,848 8,163 8,848	1973.10.26 1980.5.3 1981.10.14 1982.12.27	秋期初登頂 北稜 北東面 冬期第二登 ↓
20	竹内洋岳 Takeuchi Hirotake	1.マカルー 2.チョモランマ	8,463 8,848	1995.5.22 1996.5.17	東稜 下部初登攀 北稜

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
	1971.1. 生 (25,922m)	3.K 2 4.ナンガ・パルバット	8,611 8,126	1996.8.14 2001.6.30	南南東リブ 西面 (国際隊)
21	重 廣 恒 夫 Shigehiro Tsuneo 1947.10. 生 (33,992m)	1.K 2 2.チョモランマ 3.カンチェンジュンガC 4.ブロード・ピークM	8,611 8,848 8,482 8,051	1977.8.8 1980.5.10 1984.5.18 1985.8.12	第二登 南東稜 北西壁下部初登攀 南峰から縦走 西稜
22	遠 藤 晴 行 Endo Haruyuki 1957.2. 生 (33,077m)	1.サガルマータ 2.ナンガ・パルバット 3.ガッシャーブルム I 4.ガッシャーブルム II	8,848 8,126 8,068 8,035	1983.10.8 1988.7.12 1989.7.12 1990.7.26	南東稜 ● 西面 北稜 南西稜
23	山野井泰史 Yamanoi Yasushi 1965.4. (32,898m)	1.ブロード・ピークM 2.ガッシャーブルム II 3.チョー・オユー 4.K 2	8,051 8,035 8,201 8,611	1991.7.30 1993.7.31 1994.9.23 2000.7.30	西稜 南西稜 南西稜、単独初登攀 A P 南々東リブ、単独 ●
24	高 橋 和 宏 Takahashi Kazuhiro 1973.10. 生 (40,411m)	1.K 2 2.マナスル 3.ガッシャーブルム II 4.ガッシャーブルム I	8,611 8,163 8,035 8,068	1996.8.14 1997.10.8 2001.7.10 2001.8.13	南々東リブ ★ 北東面 南西稜 北稜
25	戸 高 雅 史 Todaka Masafumi 1961.12. 生 (32,823m)	1.ナンガ・パルバット 2.ガッシャーブルム II 3.ブロード・ピークM 4.K 2	8,126 8,035 8,051 8,611	1990.8.18 1993.7.31 1995.7.19 1996.7.29	南西稜 南西稜 N～Cから縦走 南東稜単独 ●
26	山野井 妙 子 Yamanoi Taeko 1956.3. 生 (32,750m)	1.ブロード・ピークM 2.マカルー 3.ガッシャーブルム II 4.チョー・オユー	8,051 8,463 8,035 8,201	1991.7.30 1991.10.7 1993.7.31 1994.9.25	西面 ※旧姓長尾 ● 北西稜 南西稜 南西壁 アルパイン・スタイル
27	吉 田 文 江 Yoshida Fumie 1955.10. 生 (32,454m)	1.ガッシャーブルム II 2.ダウラギリ I 3.チョー・オユー 4.ブロード・ピークM	8,035 8,167 8,201 8,051	1988.8.8 1990.10.9 1993.10.12 1997.7.16	南西稜 ※旧姓木村 北東稜 北西面 西稜
28	谷 口 守 Taniguchi Mamoru 1948.12. 生 (32,446m)	1.ナンガ・パルバット 2.ブロード・ピークM 3.チョー・オユー 4.ガッシャーブルム I	8,126 8,051 8,201 8,068	1983.7.31 1988.8.13 1992.9.20 1994.8.12	西面 ★ 西稜 北西面 北稜
29	渋谷 由 加 Shibuya Uka 1966.1. 生 (32,430m)	1.ナンガ・パルバット 2.ガッシャーブルム I 3.ガッシャーブルム II 4.チョー・オユー	8,126 8,068 8,035 8,201	1988.7.12 1989.7.12 1990.7.26 1994.9.25	西面 ※旧姓遠藤 北稜 南西稜 南西壁 アルパイン・スタイル
30	川 村 晴 一 Kawamura Haruichi 1947.12. 生 (26,045m)	1.カンチェンジュンガM 2.チョゴリ 3.サガルマータ	8,586 8,611 8,848	1980.5.14 1982.8.15 1983.10.8	北壁 初登攀 ●★ 北稜 初登攀 ● 南東稜 ●

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
31	村上 和也 Murakami Kazunari 1955.3. 生 (25,975m)	1. ローツェ 2. サガルマータ 3. K 2	8,516 8,848 8,611	1983.10.19 1983.12.16 1985.7.24	西面 ★ 南東稜 冬期第三登 南東稜
32	貫田 宗男 Nukita Muneo 1951.3. 生 (25,897m)	1. チョモランマ 2. サガルマータ 3. チョー・オユー	8,848 8,848 8,201	1991.5.27 1994.10.10 1998.9.26	北稜 南東稜 北西面
33	今村 裕隆 Imamura Hirotaka 1959.4. 生 (25,660m)	1. チョゴリ 2. カンチェンジュンガM 3. マカルー	8,611 8,586 8,463	1990.8.9 1991.5.24 1991.10.5	北西壁 下部初登攀 北東支稜 北西稜
34	×吉野 寛 Yoshino Hiroshi 1950.2. (25,626m)	1. ダウラギリ I 2. チョゴリ 3. サガルマータ	8,167 8,611 8,848	1978.5.11 1982.8.14 1983.10.8	南稜 北稜 初登攀 南東稜 ↓ ●
35	×禿 博信 Kamuro Hironobu 1951.10. (25,626m)	1. ダウラギリ I 2. チョゴリ 3. サガルマータ	8,167 8,611 8,848	1981.6.2 1982.8.15 1983.10.8	北東稜 単独 北稜 ● 南東稜 ↓ ●
36	坂本 正治 Sakamoto Shiyoji 1959.10. (25,565m)	1. ローツェ 2. チョモランマ 3. チョー・オユー	8,516 8,848 8,201	1997.10.21 1998.5.18 1999.9.26	西面 北稜 北西面
37	八木原 圀明 Yagihara Kuniaki 1946.11. (25,554m)	1. ヤルン・カン 2. サガルマータ 3. チョー・オユー	8,505 8,848 8,201	1981.5.9 1985.10.30 1993.10.12	南東面 日本人初登頂 南東稜 北西面
38	山本 宗彦 Yamamoto Munehiko 1959.12. (25,362m)	1. ブロード・ピークM 2. チョモランマ 3. マカルー	8,051 8,848 8,463	1985.8.12 1988.5.5 1995.5.22	西稜 北稜 東稜下部
39	統 素美代 Tsuzuki Sumiyo 1967.12. (25,250m)	1. チョー・オユー 2. チョー・オユー 3. チョモランマ	8,201 8,201 8,848	1992.8.15 1996.9.27 1998.5.25	北西面 北西面 北稜
40	澤田 実 Sawada Minoru 1968.7. (25,141m)	1. ダウラギリ I 2. ナンガ・パルバット 3. チョモランマ	8,167 8,126 8,848	1995.10.4 1997.7.7 1998.5.19	北東稜 西面 北稜
41	佐藤 光由 Sato Mitsuyoshi 1961.4. (25,100m)	1. サガルマータ 2. チョー・オユー 3. ブロード・ピークM	8,848 8,201 8,051	1985.10.30 1993.10.8 1997.7.16	南東稜 北西面 西稜
42	田部 井淳子 Tabei Junko 1939.9. (25,076m)	1. サガルマータ 2. シシャパンマM 3. チョー・オユー	8,848 8,027 8,201	1975.5.19 1981.4.30 1996.9.20	南東稜 女性初登頂 北東稜 ★ 北西面 56歳
43	長久保 浩司 Nagakubo Koji 1969.4. (24,847m)	1. ガッシャーブルム II 2. K 2 3. チョー・オユー	8,035 8,611 8,201	1993.7.22 1996.8.14 1999.9.28	南稜 南々東リブ 北西面
44	鈴木 幹夫 Suzuki Mikio 1967.3. (24,820m)	1. K 2 2. シシャパンマC 3. チョー・オユー	8,611 8,008 8,201	1997.7.19 1991.9.15 2001.10.11	西稜～西壁上部初登攀 北東稜 北西面

番号	氏名	山名	標高	登頂年月日	ルート等
45	× 斎藤安平 Saito Yasuhira 1953.1. 生 (24,421m)	1.ダウラギリ I	8,167	1982.10.18	北西稜 初登攀
		2.マナスル	8,163	1985.12.14	北東面 アルパイン・スタイル
		3.アンナブルナ I	8,091	1987.12.20	南壁 冬期初登攀
46	渡邊玉枝 Watanabe Tamae 1938.11. (24,403m)	1.チョー・オユー	8,201	1991.9.28	北西面 52歳
		2.ダウラギリ I	8,167	1994.10.1	北東稜 55歳
		3.ガッシャーブルム II	8,035	1998.7.22	南西稜 59歳
47	× 根津皖一 Nezu Yoshikazu 1939.12. 生 (24,403m)	1.チョー・オユー	8,201	1991.9.28	北西面 51歳
		2.ダウラギリ I	8,167	1994.10.1	北東稜 54歳
		3.ガッシャーブルム II	8,035	1998.7.22	南西稜 58歳
48	× 小西政継 Konishi Masatsugu 1938.11. (24,338m)	1.ダウラギリ I	8,167	1994.10.1	北東稜 55歳
		2.シシャパンマC	8,008	1995.9.26	北東稜 56歳
		3.マナスル	8,163	1996.9.30	北東面 57歳
49	加藤慶信 Kato Yoshinobu 1976.1. (24,266m)	1.マナスル	8,163	1997.10.8	北東面
		2.ガッシャーブルム II	8,035	2001.7.10	南西面
		3.ガッシャーブルム I	8,068	2001.8.13	北稜
50	× 佐藤正倫 Sato Masamichi 1963.8. (24,212m)	1.ナンガ・バルバット	8,126	1990.7.24	西面
		2.ブロード・ピークM	8,051	1991.7.12	西稜
		3.ガッシャーブルム II	8,035	1993.7.31	南稜

2 峰登頂者一覧表

1 中村 省爾 1942,5,28生	22 鈴木 清彦 1957,2,12生	43 加藤 智二 1960,5,10生
2 鈴木 昇己 1953,2,21生	23 川原 慶紀 1940,11,19生	44 鈴木 孝雄 1938,5,18生
3 保坂 昭憲 1948,2,16生	24 大谷 映芳 1947,4,3生	45×日野 悦郎 1940,5,25生
4 八嶋 寛 1950,3,10生	25 瀧根 正幹 1951,10,17生	46 安村 淳 1946,8,24生
5×大西 宏 1962,5,14生	26 奥田 仁一 1966,9,13生	47 東條真百合 1955,6,12生
6 坂下 直枝 1947,2,6生	27 重野太肚二 1943,4,17生	48 大久保由美子 1968,12,10生
7×赤坂 謙三 1968,4,10生	28 高橋 和宏 1973,10,14生	49 賀集 信 1949,1,21生
8×椎名 厚史 1970,6,13生	29 鈴木 茂 1955,1,8生	50 林 孝治 1951,9,30生
9 松原 尚之 1965,3,1生	30 山本 秀夫 1949,12,25生	51 桑原 巖 1935,11,3生
10 大木 哲 1956,2,26生	31×柳沢 幸弘 1955,2,8生	52 富田 雅昭 1956,6,24生
11 井本 重喜 1963,1,20生	32 吉田 祐一 1970,8,7生	53 池田 壮彦 1946,10,29生
12 野口 健 1973,8,21生	33 稲葉 英樹 1964,4,3生	54×品川 幸彦 1968,12,14生
13 萩尾 雄二 1972,7,3生	34 大宮 求 1949,4,1生	55 早川 敦 1973,8,16生
14 山本 俊雄 1936,7,13生	35 小野 岳 1960,7,20生	56 森 章一 1975,4,27生
15 田中 敏雄 1955,8,17生	36 福島 正明 1950,10,18生	57 大野 和明 1977,2,23生
16 中島 俊弥 1964,12,18生	37 和田 城志 1949,10,16生	58 谷山 宏明 1979,2,1生
17 工藤 寛 1966,6,28生	38 池田 錦重 1938,11,23生	59 小笠原岩雄 1952,11,25生
18 花田 博志 1960,3,25生	39 上野 幸人 1954,1,23生	60×福本 誠志 1973,12,22生
19 菊池 守 1955,5,28生	40 中西 紀夫 1958,3,12生	61 辻 美行 1947,6,5生
20 矢野 利明 1952,11,1生	41 棚橋 靖 1963,1,26生	(注) トータル獲得順。同位の場合
21 村口 德行 1956,5,28生	42 清水 修 1958,4,8生	合は先に2峰目に登頂した順。

八千メートル峰の記録

(2001年12月31日現在 山森欣一作成)

I. 初登頂

マナスル 1956 日本山岳会 (今西壽雄、ソナム・ギャルツェン)

II. 第二登

- | | | | | | |
|------------|------|-----------|-----------------|------|--------|
| 1) マカルー | 1970 | 日本山岳会東海支部 | 5) ブロード・ピークM | 1977 | 愛知学院大学 |
| 2) ダウラギリ I | 1970 | 同志社大学 | 6) カンチェンジュンガ南峰 | 1984 | 日本山岳会 |
| 3) マナスル | 1971 | 東京都山岳連盟 | 7) カンチェンジュンガ中央峰 | 1984 | 日本山岳会 |
| 4) K 2 | 1977 | 日本山岳協会 | | | |

III. 最年少登頂者

最高峰エヴェレスト 重川英介 (チョモランマ) 1996. 5. 11登頂 21歳と166日
その他の八千米峰 田島崇行 (ガッシャーブルム II) 1997. 7. 14登頂 20歳と155日

IV. 最高齢登頂者

最高峰エヴェレスト 山本俊雄 (チョモランマ) 2000. 5. 19登頂 63歳と311日
その他の八千米峰 平田恒雄 (チャー・オユー) 2000. 5. 12登頂 65歳と100日

V. ハットトリック (暦年一年間で3座登頂) ●印は無酸素

- 1) ×山田 昇 (35歳) 1985年
7/24 K 2 (●) 10/30 サガルマータ (●) 12/14 マナスル
- 2) ×山田 昇 (38歳) 1988年
5/5 チョモランマ 10/24 シシャパンマM 11/6 チャー・オユー
- 3) ×三枝照雄 (31歳) 1988年
5/5 チョモランマ 10/24 シシャパンマM 11/6 チャー・オユー
- 4) 田辺 治 (32歳) 1993年
8/24 ブロード・ピークM 10/11 チャー・オユー
12/20 サガルマータ
- 5) 江塚進介 (32歳) 1993年
8/24 ブロード・ピークM 10/11 チャー・オユー
12/20 サガルマータ

VI. 冬期登頂者

- | | | | |
|-----------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 1) ×山田 昇 | 1983 (サガルマータ) | 1985 (マナスル) | 1987 (アンナプルナ I) |
| 2) ×斎藤安平 | 1985 (マナスル) | 1987 (アンナプルナ I) | |
| 3) 小泉章夫 | 1982 (ダウラギリ I) | 4) 尾崎 隆 | 1983 (サガルマータ) |
| 5) 村上和也 | 1983 (サガルマータ) | 6) ×三枝照雄 | 1987 (アンナプルナ I) |
| 7) ×小林俊之 | 1987 (アンナプルナ I) | 8) 名塚秀二 | 1993 (サガルマータ) |
| 1 0) 後藤文明 | 1993 (サガルマータ) | 1 1) 田辺 治 | 1993 (サガルマータ) |
| 1 2) 江塚進介 | 1993 (サガルマータ) | 1 3) 尾形好雄 | 1993 (サガルマータ) |
| 1 4) 星野龍史 | 1993 (サガルマータ) | | |

VII. アルパイン・スタイル

- 1) ×禿 博信 1981 (ダウラギリ I) 北東稜通常ルート、単独
- 2) ×山田 昇 1985 (マナスル) 北東面通常ルート、冬期
- 3) ×斎藤安平 1985 (マナスル) 北東面通常ルート、冬期

- 4) 山野井泰史 1994 (チョー・オユー) 南西壁新ルート、単独
- 5) 山野井妙子 1994 (チョー・オユー) 南西壁スイス／ポーランドルート
- 6) 渋谷由加 1994 (チョー・オユー) 南西壁スイス／ポーランドルート
- 7) 戸高雅史 1995 (ブロード・ピークM) 北峰～中央峰から縦走
- 8) 北村俊之 1995 (ブロード・ピークM) 北峰～中央峰から縦走
- 9) 服部 徹 1995 (ブロード・ピークM) 北峰～中央峰から縦走
- 10) 戸高雅史 1996 (K2) 南東稜、単独
- 11) 山野井泰史 2000 (K2) 南々東リブ、単独

VIII. 単独

- 1) ×禿 博信 1981 (ダウラギリI) 北東稜
- 2) 山野井泰史 1994 (チョー・オユー) 南西壁新ルート
- 3) 戸高雅史 1996 (K2) 南東稜
- 4) 山野井泰史 2000 (K2) 南々東リブ

IX. 縦走

- 1) 重廣恒夫、和田城志、三谷統一郎 1984 (カンチェンジュンガ南峰→中央峰)
- 2) 戸高雅史、北村俊之、服部徹 1995 (ブロード・ピーク中央峰→主峰)

X. 初登攀ルート

- 1) マカルー 南東稜 (1970年春) 日本山岳会東海支部
- 2) マナスル 西稜 (1971年春) 東京都山岳連盟
- 3) ダウラギリI 南稜 (1978年春) イエティ同人
- 4) ダウラギリI 南東稜 (1978年秋) 群馬県山岳連盟
- 5) チョモランマ 北西壁下部 (1980年春) 日本山岳会
- 6) カンチェンジュンガM 北壁 (1980年春) 山学同志会
- 7) K2 西稜→西壁→南南東稜 (1981年夏) 早稲田大学
- 8) アンナプルナI 南壁 (1981年秋) イエティ同人
- 9) チョゴリ 北稜→北面 (1982年夏) 日本山岳協会
- 10) ダウラギリI 北西稜 (1982年秋) カモシカ同人
- 11) ガッシャーブルムI 北稜下部クーロアール (1986年夏) 登歩渓流会
- 12) チョゴリ 北西壁下部→北面 (1990年夏) 横浜山岳協会
- 13) チョー・オユー 南西壁 (1994年秋) 山野井泰史
- 14) マカルー 東稜下部→北西稜 (1995年春) 日本山岳会
- 15) ナンガ・パルバット 北面下部→東稜 (1995年夏) 千葉工業大学
- 16) K2 西稜→西壁上部 (1997年夏) 日本山岳会東海支部

XI. 五大峰のうち3座登頂者

- 1) ×山田昇 (1981カンチェンジュンガM、1983ローツェ、1983サガルマータ、1985K2、1985サガルマータ、1988チョモランマ)
- 2) 尾崎 隆 (1980チョモランマ、1983ローツェ、1983サガルマータ、1984カンチェンジュンガM、2001マカルー)
- 3) 名塚秀二 (1985サガルマータ、1990チョゴリ、1991カンチェンジュンガM、1993サガルマータ)
- 4) 川村晴一 (1980カンチェンジュンガM、1982チョゴリ、1983サガルマータ)
- 5) 村上和也 (1983ローツェ、1983サガルマータ、1985K2)
- 6) エヴェレスト、K2、マカルー (山本篤、田辺治、竹内洋岳)
- 7) K2、カンチェンジュンガM、マカルー (今村裕隆、谷川太郎)

事務局日誌 (7月)

- 2日(火) CMAへニンチン・カンサ隊費用を送金
- 3日(水) 創立35周年記念トレッキング・パンフレットを役員等へ発送
- 5日(金) 外務省へニンチン・カンサ隊「願い書&念書」を送付
- 6日(土) ニンチン・カンサ隊遺族会(ルーム) 同上壮行会(かんぼ・35名) 国際山岳年「富士山エコ・フォーラム」富士宮市、尾形
- 9日(火) ヒマラヤ369号発送
ニンチン・カンサ隊ビザ申請
- 10日(水) 2003年サマー・キャンプ募集要項を希望者16名に送付
- 11日(木) 華甲該当者16名に同書発送
アテネ書房「ヒマラヤへの挑戦4」出版協議
- 12日(金) 「登山4団体懇談会」於、新宿、中村屋(酒井、山森、尾形、中岡)

- ニンチン・カンサ隊ビザ受領
- 15日(月) RCCII「異端の登攀者」出版記念祝賀会、市ヶ谷(酒井、山森)
- 20日(土) ニンチン・カンサ隊4名出発
- 22日(月) JAC女性合同チャーター・オユース隊壮行会兼東カラコラム報告会、新宿中村屋(尾形、中川)
- 29日(月) 東京集会(10名)

ヒマラヤ No.370 (9月号)

平成14年8月10日印刷 14年9月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬米ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
 TEL:(03)3740-2674(直)
<http://www.tokyo-np.co.jp/>

最新 クライミング技術

ジムでレクリエーションからマルゼンチ、アルパイン、ロッククライミングまで、すべてのロッククライマー必読の書。この技術は単なるマニュアルではなく、その意味や、選択基準までをきめ細かく解説。実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくトクバエ。

菊地敏之 著
1600円

山小屋の主人の炉端語

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取って置きのお話。

工藤隆雄 著
1500円

すぐ役立つ 山の花学

「飛騨高山の花博士」として知られる著者の、山の花見術入門書。

小野木三郎 著
1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法

山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。

飯田睦治郎 著
桜井博幸 著
1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はここに。

石井光造 著
1300円

北アルプス やまびと物語

「岳人」に3年余り連載した「山人探訪男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。

柳原修一 著
1456円

北アルプス 山小屋物語

歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。

柳原修一 著
1456円

花と歴史の50山

「花と歴史の山旅」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。

田中澄江 著
1359円

増補六十歳からの日本三百名山

60歳から13年間で二百座を踏破したスーパーお爺さんの山行記。

田中三郎 著
1456円

新・山靴の音

選歴をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著
1262円

中年年登山 なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著
1500円

登山の運動生理学百科

「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著
2000円

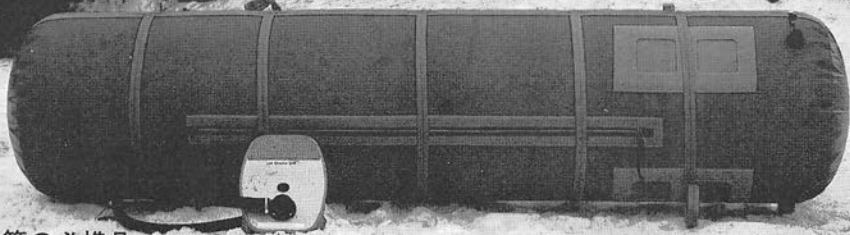
山書散策

今まで多く発刊された山書。何を読んだらよいか、そんな時の指針として——「山人」連載時から好評。

河村正之 著
1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

THE GAMOW BAG



高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

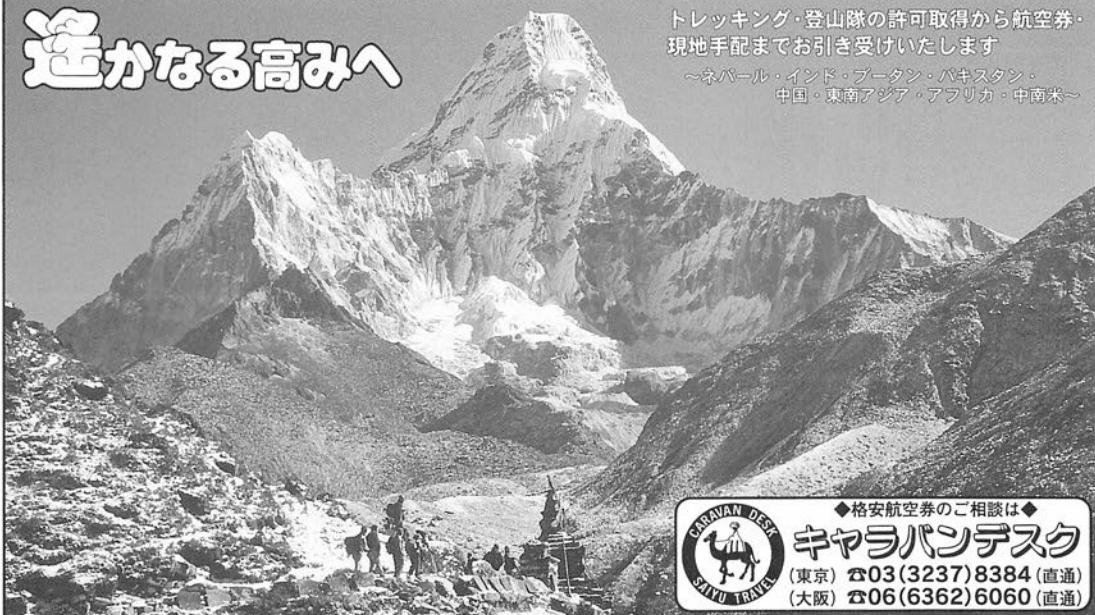
TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャロバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

株式会社 西遊旅行

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料)をご利用下さい。

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外商部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004